

『ショウ・ボート』に出会って

井上 サチ子

いのうえ さちこ (Sachiko Inoue)

文化学院卒業

東京オペラ・プロデュース、シェイクスピア・シアターをはじめ、テーマ・パーク、企業ユニフォーム、CM等、ジャンルを超えた衣裳の仕事にたずさわる。

1990年 文化庁在外研修制度で中国/北京青年芸術劇院にて中国服装史、少数民族衣裳を学ぶ
1994年 (有)井上サチ子オフィスを立ち上げる

私が初めて『ショウ・ボート』に出会ったのは、MGM映画であった。私がおこなったのは、製作後10年以上も経ってからのことであった。その頃私は大手アパレル企業のデザイナーであったが「なんか違う」と思う日々、舞台の衣裳関係の仕事がしたいと、なんのあてもないままに退職。さまざまな仕事をしてきた。シェイクスピアからテーマ・パーク、CM、児童劇団、博覧会のユニフォーム等。晴れがましい衣裳デザイナーを夢見たおぼえもなく、メジャーな劇団、演出家から得に最良にされたこともない。そのような私をずっと長い間、引き立ててくれたのが富山市民文化事業団の芸術監督に就任された、奈木隆さんだった。5年間富山で「名作ミュージカル」を手がけ、各方面から評価されて来たプロデューサーだ。奈木さんから「次はショー・ボートです」と聞いたとき、嬉しさでろくに返事もできなかった。これまで上演してきた名作ミュージカルの演目を思えば当然の選択であろうし、富山での大詰めとしては実にふさわしい作品だと思った。『ショウ・ボート』は、確かに富山ミュージカルとしての総決算ではあるが、舞台にたずさわる者としてひとつの「節目」になるのでは、と考えるようになった。その思いは台本をいただいたときでも、最初のミーティングでもなく、稽古が始まった頃だったと思う。ここで上演史を述べるまでもないけ

れど、おかげさと言えど何か歴史に立ち会っているような緊張を覚えた。これは本物の「初演」なのだ。映画の『ショウ・ボート』はあまりにも眩しく、洗練され立派な娯楽であった。それに胸を躍らせたけれど、これから自分が関わるのはオリジナル舞台の出現という仕事で、およそ90年前に幕をあけたミュージカルの誕生なのだ。オペラと違ってミュージカルは時代に敏感でスコアさえ自在にアレンジされ、時のファッションに影響され言葉さえ変わりがねない。現在の眼では信じられないが、1927年のジークフェルド劇場の初演は2度と再現されないままだったという。その失われた舞台を蘇らせたのが、ハロルド・プリンスだが、残念なことにそのツアー・バージョンさえ日本には来なかった。そして90年代の私には駆けつける資力も時間もなかった。友人がロンドンでツアー版を見てがっかりしたと言う。装置、衣裳、ストローマンの振り付けも「ダサイ」と思ったが、観ているうちにそれが初演の復元を目指していることを思い出し、衿を正したと言う。この芝居には多かれ少なかれ巨大な先入観が出来上がっていて、地味とか質素というものが意図されたのだと、すぐにはわかりにくいかもしれない。いざ、自分の仕事に取り掛かるとかなりのハードワークとなった。とは言え、400着近い衣裳も昨今の大規模な舞台をみればさしたる着数ではないか



名古屋能楽堂 (愛知県名古屋市)
(撮影:千早正美)

もしれない。個々の人物の衣裳も特殊な創意工夫が必要なわけではない。でもこの着数は、ミシシッピーに浮かぶコットンブラッサム号を背景に3代にわたる家族とその周りの人々の時の流れ、心の深さを2幕に凝縮させるための手がかりだ。それを視覚的に表現するのが衣裳という大役に、ありったけの知恵を絞ることになった。そして、あらためてこうした背景をスタッフが熟知していることに感嘆した。ハロルド・プリンスにとっても楽な仕事ではなかったに違いない。復元という仕事に意義があらうとあるまいと現代の観客に気に入られるとは限らない。「古い」と感じるかもしれない。でも、そう思ったとき、カーンの曲がこれまでとは違って響くようになり、完成度の高い舞台が出来上がった。これに魅了されない観客がいるだろうか。古臭いと思われるかもしれない楽曲が、その普遍の力で私を時を越えてマンハッタンに運んでくれたように、今初めて上演されたようにしか思えなかった。仕事をしたというよりは、稽古から、長い長い物語を私は堪能した。幕開けの「コットン・ブラッサム号」から始まる『ショウ・ボート』は、日本で富山のお客様が初の目撃者となった。この「節目」を与えてくれた、共に舞台を創り上げた関係者の皆様、そしてこの一文の機会を与えて下さったステージドアに心から感謝いたします。